

第9回（平成28年） 海洋立国推進功労者表彰 受賞者リスト

1. 「海洋立国日本の推進に関する特別な功績」分野

部 門	氏名・名称	年 齢	所 属	功 績 事 項
普及啓発 ・ 公益増進	鹿児島県立鹿児島水産 高等学校	-	-	【地球環境に貢献する海象・資源調査及び海運業界後継者育成】 実習船薩摩青雲丸は、国際航海に従事する第三種漁船であり、年間100回程度のマグロ延縄資源調査と海洋観測を実施している。全国の水産系高等学校の中でも航海日数及びマグロ延縄資源調査・海洋観測数ともにトップであるとともに、ハワイ海域の海象・気象の状況やマグロ等資源の状況の記録を採り国立研究開発法人水産総合研究センター国際水産資源研究所へ報告することにより海域の海象・気象への地球温暖化の影響やマグロ等資源の状況調査に貢献している。
普及啓発 ・ 公益増進	小宮山 宏	71	(株)三菱総合研究所	【総合的な我が国海洋政策の推進に関する取組】 総合海洋政策本部参与会議第1期及び第2期の参与を努め、我が国の海洋政策の推進に尽力された。特に、第2期においては、座長として、第2期海洋基本計画の策定を主導し、現在の海洋政策の方向性を決定づけた。 また、総合的な海洋政策の形成を目指す日本海洋政策学会初代会長として、海洋政策の発展に資する学術研究を主導することにより、広く国民に対し海洋政策の啓蒙活動に尽力された。 さらに、第1回から第8回までの海洋立国推進功労者表彰選考委員会委員長に就任され、中立的な立場である選考委員会での議論を取りまとめる重責を担った。
科学技術・学術・ 研究・開発・技能	植松 光夫	63	東京大学大気海洋研 究所	【海洋・大気科学における多分野横断型研究】 「海洋大気エアロゾル組織の変動と影響予測(平成10年採択)」の研究代表者として、陸上から海洋へ運ばれてくるエアロゾルや気体成分を基に、その実数値と数値計算技術を用いて東アジア域での化学天気予報を実用化し、大気中化学成分濃度の予測を可能とした。また、研究成果は、世界的に著名な科学雑誌である「Nature/Science」誌に3報の論文を含む103報の英文査読付きのSCI準拠論文として発表。さらに、当該論文は、海洋化学分野のトップクラスのものであり、数々の賞を受賞し海洋立国日本への海洋化学分野において貢献している。

2. 「海洋に関する顕著な功績」分野

部 門	氏名・名称	年 齢	所 属	功 績 事 項
海洋に関する 科学技術振興	見延 庄士郎	53	北海道大学大学院理 学研究院	【海洋と大気の物理的な相互作用の研究】 海洋は大気と並ぶ二大流体圏の一つであり、特に海洋と大気の物理的な相互作用と変動は地球の気候に大きな影響を及ぼす。氏は、北太平洋全域におよぶ大気と海洋に50～70年変動と20年変動を発見し、それらの変動が日本を含め太平洋と周辺領域に及ぼす影響を同定された。また、熱帯から膨大な熱を運び大気に放出する暖流が、大気の大気自由対流圏を貫くように、その上層まで影響することを発見し、Nature表紙論文として報告し国内外の研究発展に大きな影響を与える等、海洋大気の変動と相互作用の研究に貢献された。
水産振興	東安房漁業協同組合営 漁計画実行委員会連絡 協議会		東安房漁業協同組合	【アワビ輪採方式の開発と確立】 昭和50年代から、アワビの漁獲減と大型貨物船の座礁を契機として、アワビ造成漁場による輪採方式を導入、推進した。アワビ輪採漁場を旧安房郡千倉町全体に広げ、輪採漁場からの水揚げは、近年5～6トンで推移し、アワビ漁獲量は10%～25%を占めるまでに至った。
海事	三原 廣茂	69	(有)三原汽船	【内航船における我が国初となる女性管理職の登用】 従前、男性社会と言われ女性の活用に消極的であった内航海運業界において、平成10年から女性の採用を行っており、現在、同社における女性船員の占める割合は約20%(全国平均1.6%)に上る。また、平成21年7月には、当時28歳の女性船員(寺田美夏氏)を内航海運業界では初となる船長に登用し、さらに、結婚、出産後も引き続き就労できる環境作りも行っており、時代に先駆け女性の活用を積極的に行った。
自然環境保全	日生町漁業協同組合	-	-	【アマモ場の再生】 アマモ場再生活動発祥の地として知られている日生町漁業協同組合では、昭和60年から30年もの長きにわたり活動を継続してきた。その結果、一時は12haまでに減少した日生町地先のアマモ場は、約250haまで回復した。近年では、漁業者だけでなく、消費者団体や次世代を担う生徒・学生たちも活動に参加し、活動の輪は新たな広がりを見せ、国内さらには世界各国においても模範事例として紹介されている。

※年齢は平成28年8月25日現在